

指定校番号	30015	学級活動	○ 児童会活動	クラブ活動	学校行事
-------	-------	------	---------	-------	------

平成30年度生徒指導集中対策及び生徒指導実践指定校「特別活動の取組事例」

学校名	北広島町立壬生小学校	校長	板倉 寿恵美	生徒指導主事	中藪 隆行
-----	------------	----	--------	--------	-------

取組事例名 『児童が主体となる児童会活動の充実』

取組における育てたい資質・能力

人間関係形成		社会参画		自己実現	
「想像力」	3	「安全・安心をつくる力」	2	「協働する力」	1

取組のねらい『キーワード 自治的能力の育成』

児童会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。

取組の具体的内容『キーワード 自分達で解決策を考える』

学校生活の中で課題である部分を提示し、その解決策を児童会活動を中心に、児童による自治的活動で解決していく取組を行った。具体的には、『廊下を走る人が多い』、『廊下や階段の右側通行が徹底されておらず危険』、『無言移動が徹底されていない』、『気持ちのよい挨拶をする児童が少ない』といった課題を解決する方策を考えさせた。

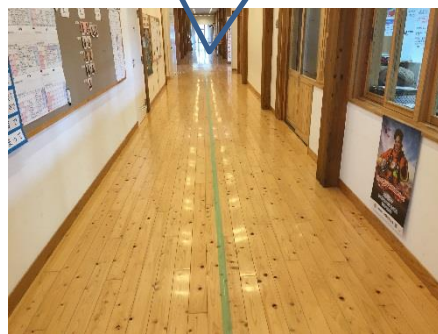
【廊下・階段について】

- 標識を各階の廊下に設置し、注意喚起する。
- 廊下や階段に中央線を設置する。
- 進行方向（右側通行）が分かるような掲示を設置する。



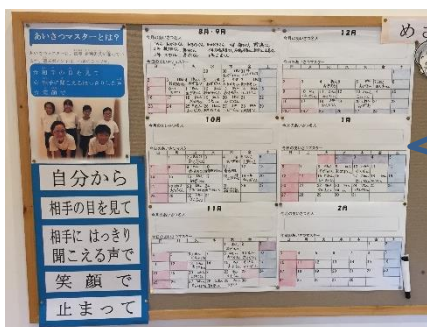
標識は職員が用意し、設置を児童が行いました。

中央線は、休憩時間を使って児童がテープを貼りました。



【挨拶について】

- 毎朝、児童会役員によるあいさつ運動を実施する。
- 毎日1名ずつあいさつのよかった子を児童会役員が選び、『あいさつマスター』として朝の放送で紹介する。紹介した子の学年と名前を職員室前のカレンダーに掲示していく。
- 児童会選出の『あいさつマスター』とは別に、毎月職員が、日々のあいさつの様子をから『あいさつ名人』を認定し、表彰している。



児童会役員があいさつマスターを選ぶ基準は、「自分から」「相手の目を見て」「相手にはっきり聞こえる声で」「止まって」の4点です。

あいさつマスターに選ばれた児童は、朝の放送で紹介され、カレンダーにも名前を書いてもらいます。全校児童の意欲付けに役立っています。



毎月職員が日々の様子から「あいさつ名人」を選んでいます。選ばれた児童には、あいさつ名人のメダルを贈呈し、メダルを持った顔写真を1ヶ月職員室前に掲示しています。

取組の課題・創意工夫『キーワード：自主的活動と時間の確保』

- ▼ 委員会の時間だけでは話し合いや準備、実施の時間が確保できなかったため、休憩時間を使って活動を進めた。時間の確保や、効率化に課題がある。
- ▼ 見通しを持って計画的に物事を進める力に課題があることが分かった。
- マークや標語など視覚的に訴える方法を考えた。

取組の成果（効果）『キーワード：生活態度の向上』

- ほとんどの児童が、右側通行を意識して生活するようになった。
- 廊下を走る児童が少なくなった。
- あいさつマスターやあいさつ名人に選ばれることが励みになり、気持ちのよい挨拶を日常的にする児童が増えた。
- 地域の登下校見守り隊の方から、子ども達のあいさつがよくなったと評価していただけるようになった。
- 児童会役員の児童から学校をよりよくするための方策を児童から提案を受けることが増えた。（夏休み、冬休みの生活のきまりを手書きからパソコン入力に切り替え、次年度の児童会役員の仕事量の緩和につながる提案や毎日の一斉下校時に改善を呼びかける内容など）

今後の展開『キーワード 継続とレベルアップ』

- 定期的に意識喚起をしていかないと児童が守ろうとする意欲が低下するため、継続した啓発運動が必要である。今年度は、啓発活動を生徒指導部の職員が主導で行うことが多かったが、徐々に啓発活動も児童会活動の中に位置づけ、児童が主体となって活動する場を増やしていきたい。
- 今年度は、「あいさつ」と「廊下の右側通行」「廊下を走らない」に絞って活動を進めてきた。来年度以降、学校生活の中にある課題を解決していく活動の量や種類を増やし、自治的活動が活発になることで、自分たちの学校がよくなっていく喜びや達成感を味わわせていきたい。

他教科との関わり『キーワード 想像力と多面・多角的な見方、考え方』

- 児童会活動、委員会活動で児童が主体的に活動する場を意図的に増やし、児童が主体となりさまざまな課題を解決していく中で、多様性を認めていくことや柔軟な考えを持つことの大切さを感じる場となった。これは、すべての教科の授業を行う上で必要な受容的な学級風土づくりにつながっていると考える。